

龍南懷古拾遺：追懷

著者	友枝，高彦
雑誌名	龍南
巻	2 0 0
ページ	4 2 - 4 9
発行年	1926-12-25
その他の言語のタイトル	龍南懷古拾遺：追懷
URL	http://hdl.handle.net/2298/8900

龍南懷古拾遺

友 枝 高 彦

は し が き

「龍南」第二百號記念に何なりと寄稿せよとの命ありたれば昔の思出なりと記しみると考へてゐたところが江口俊博君の才筆によつて興味深い龍南古事記が述べられたれば、予は二三の拾遺談を書いてその責をふさかうと思ふ。

一、五中の新設附有進校

明治十八年十二月初めて内閣の制が出来て伊藤博文内閣總理大臣となつた時森有禮文部大臣に任命せられこゝに教育上の大改革を試みようとして諸種の方案の實行を見たのであるが、高等教育に於て日本全國を五學區に分ち九州一圓を第五區として明治二十年四月高等中學校の位置を熊本を定められた。そして森文部大臣の考ではゆく／＼それ等の高等中學校を大學にする積であつたであらう。どの學校も一体に規模廣大で皆煉瓦造で出来たのであつた。二高などは當時運輸の便惡かつた爲に木造であつたが、その堅固さは煉瓦造にまけないといはれて居る。事實に於て第一、第三、何れも大學となり金澤もまた官立醫科大學となつて居る。元來森といふ人は進歩派の急先鋒で明治の始、米國に公使となつてゐた時に、日本の國語を英語にしてはどうかといふことについて米國人の意見を徴して却つて米國人から諫止されたこともあつた。あれやこれやで森は誤解されたこともあつたやうであるが、とにかく大改革者であつた。森は最も体育を奨勵したのであつたが、その拔擢によつて五中校長として就任した野

村彦四郎先生は入學試験の時に競争によつて成績を判別したこともあつたといふことである。

熊本での最初の位置は古城町であつた。この時代は明治二十年から二十二年に至る間で五中の「神代」とも稱すべき時であつて余の如きはたゞ「古老」から當時の武勇談をきかされる位である。二十二年龍南の新校舎に移轉して茲に九州各地方から中學卒業の優秀者を本科一年に收容した。當時本科二年豫科三年補充二年の七年制が實行されてゐたのであつた。予が五中に入學したのは龍南校舎建設第二年の二十四年九月であつた。豊前の田舎から飛出して行つて（尤もその前に東京見物に出かけたことはあつたが）煉瓦造の校舎に入つた時にはどうした厚い壁だらふかと驚いたこともあり、そして何だか偉くなつたやうな氣がしたのであつた。

五中創設と共に長崎縣醫學校が五中醫學部となつて一校長の下に統率された譯であるが、その醫學部は明治三十四年に長崎醫學專門學校となり遂に今日の醫科大學となつたのである、後年嘉納治五郎先生の懷舊談に「本校は熊本で醫學部は長崎にあつたが熊本は國權黨の本據地であつて長崎は自由黨優勢の處であつただけに色々苦心したことがあつた」といはれたことがある。

初期の五中といへば自分等は直ちに有進校を聯想する。有進校は五中の豫備校であつて坪井の菓子屋の二階が教場となつてゐた。校主は余田司馬人先生で五中に入學しようとするものは先づ有進校の門（門扉はないが）をくぐらなければならなかつた。教師としては余田先生が英語を教へられ五中の上級者も教鞭を執つてゐた。予は二月計りで準備して補充二級といふに入學することが出来た。

二、沖 禎 介

日露戦争を語れば必ず沖禎介や横川省三を聯想する。この兩人は明治三十七年日露兩國の開戦と共にひそかに滿洲に行き松花江の鐵橋を爆破しようとして露兵に捕えられハルビン郊外に於て銃殺されたのであつた。

その沖禎介が自分と同時に補充二級に入學を許され然も同組となつた。君は平戸の人、体軀長大氣宇宏潤自ら豪傑を以て任じ

周圍の人も亦これを許したのであつた。予等新入生は十月一日を以て寄宿舎入舎を命ぜられ予は南寮第一室に投げこまれた。それから數日後かと記憶する。夕食後舎生の多數は東方の器械体操場に於て器械体操をしてゐた。冲君はその術に妙を得て鉄棒上の「大車輪」の如きは君の得意の一つであつた。冲君が高梁の上を渡つて居ると一方の支柱の上に一學生がしきりに柱をゆすぶつてゐた。これが爲に冲君の運動が妨碍された理由でその學生をなじつたところが口論がたかまつて冲君とその學生とは高梁から下りて來るとすぐに取組合を始めた。多くの人は傍觀してゐたが、余り止めようとしめない。冲君は柔術の達人であつた。一方の學生も余程腕に覺があると見えたが、何分にも力はあつても冲の技にはかなわない。その學生は傷手を負うてはな緒の切れ下駄を持ちながら、「覺えてゐろ」の一言を残してその場を去つた。予のやうな弱虫には甚だ恐ろしい光景であつた。その傷められた學生は後年龍南武勇史に一異彩を放つに至つた筑前の佳人吉田久太郎君であつた。吉田君はそれより星野氏の門に入り柔術の奥義を極め、熊本の柔術界を風靡するに至つた。君はまたボート部設立に熱心して日清戰爭の分捕ボートを佐世保鎮守府から貰ひ受けて態々熊本まで回航して來た冒險談をもつて居るのである。

さて冲君はかやうな豪傑であつただけに西郷南州を崇拜すること最も深く龍南會雜誌上に南州談錄など掲げたことがあつた。君は繪畫に長じて一種獨特の技をもつてゐた。併し算數の學や外國語の如きは多く意に關しなかつた爲に遂に學校を去るに至つたのである。曾て同君が發起して會津白虎隊の類を瑞邦館に寄贈したことがあつたが、それには冲君は予等四十名の同級生の名を記したのであつて、十余年前熊本に就任した時探して見たが既になくなつてゐて發見することが出来なかつたのは遺憾であつた。

一日予等同組のものが龍田山の麓の一民家に於て茶話會を開いた。時刻がたてど冲君が來ない、一時間余を経てかけつけた君は喜色滿面「今日は愉快だ」といふ。どうしたかときけば「講道館柔道家の何誰を投げてやつた」と。君は講道館にとりては外派の剛者であつた。

日露戰爭始まると共に予は公用を以て英國に赴いたのであるが、ある時ロンドン繪入雜誌の中に一つ戰爭口繪を見出した。熱

視すれば沖君銃殺の光景であつて、當時既に伝えられてゐたのは沖君等が捕えられて銃殺された時沖君だけは「目隠し」を拒んで露兵をねらめながら泰然として死に就いたといふことであつた。然るにその口繪は英國從軍記者のスケッチであつたがよく沖君の風采を寫してゐるので深く感じて直ちにその雜誌を沖君の嚴父に呈したのであつた。然るにこの夏信州松本市に赴き同地開智部小學校記念博物館を參觀したところが沖君遺愛の刀が陳列されてゐるのを見て意外なところで舊友に接する思がして感慨無量なるを禁じ得なかつたのである。

三、嘉納先生と講道館柔道

嘉納先生が熊本に赴住されたのは明治廿四年の秋であつて、ちやうどその年九月自分も入學したのであつた。先生は着任早々寮舎の一室に疊を敷かせて生徒中の柔術心得あるものを集めてその技を觀られた。間もなく雨天体操場の奥室が道場となつたが何分狭い爲に生徒控所をつぶして大道場を作られた。それが瑞邦館である。先生の校長就任と共に柔道二段の本田増次郎先生が英語の教授として來任し先生の書生としては大木圓治氏が初段の資格をもつて居るといひ、更に學習院學士さん有馬純臣先生が四段の腕を以て來られたのであるから、講道館柔道はこゝに熊本の地に深い根を下すに至つた。當時熊本には星野、矢野江口諸流派があつて互に競争してゐるところに突然講道館柔道が入つて來たのであるから、從來の流派にとつてはかなりの脅威と見られた、それは嘉納先生が講道館柔道師範であるといふばかりでなく、文部省參事官から第五高等中學校長に轉任して來られたといふ社會上の特權をもつて居られることだから先生の來任は容易ならぬチャレンヂのやうに感ぜられたのであつた。また當時熊本には相當の排外氣分もあつたからである。それは單なる排外といふよりは自己の優越に對する誇が强かつた爲である。

嘉納先生が講道館師範であり、且つ校長であつた爲に柔道は著しい勢を以て擴がつて來て、生徒はいふまでもなく、教師の如くも校長官舎に於てバタ／＼やつて居られたとのことである。また實際上の競技に於ても次第に優秀の地位を占めるやうになり、武德會支部が設けられるに至つては一層の發達を見るやうになつた。當時立技は講道館が優つて居り、寝技は他流の方が

上手であるとの定評であつたが、亂取やうのことは他流では余りしなかつたのを講道館柔道が來てから大にその方面に改良するところがあつたといふことである。

瑞邦館の道場はコンクリートのタ、キの上に柱が横へられその上に板が張られ疊が敷かれあつたのであるから、固いことの上なく寒穢古の時などはまるで石の上にたゞきつけられるやうであつたが、併し自分等はそれを當然のことのやうに思つてゐたのであつた。當時柔道郎の勇者は野口彌三氏（第一銀行大阪支店長）久保惟修氏（福岡地方裁判所判事）池田泰親氏（熊本縣代議士）有働良夫氏（農林省技師）等であつた。

當時嘉納先生は三十余才の血氣盛んな時であらせられたのであつて、予等は柔道の外に道場には坐はらせられて實踐倫理の講議をも拜聽したのであつた。嚴寒の時も先生はシャツを着られず、腕を扼して講説せられた光景は今尚眼底に残つて居るのである、先生は予等の眼には實に偉大なる校長であつた。先生が熊本を去られる時には生徒皆押えられない熱涙を以てお送したのであつた。

四、秋月章軒先生

章軒先生は予等の修身と漢文との先生であつた。熊本五中の歴史と離すことの出来ない偉人である。先生は五中の一教授としてその晩年を送られたのであるが、その前半生は實に維新史と密接な關係をもつて居るのであつてかの人口に膾炙して居る「行無興今歸無家」の詩は先生の偉業を最もよく語つて居るのである。先生は常に孔子の教を基礎として倫理を説かれた。そして歸するところは治國平天下にあるのである。それでやゝもすれば理工科の學科に對しては「大工や左官で御國は治められぬ」といはれるのでその方の生徒から甚だけむがられてゐたこともあつたが、先生の高齢とその玲瓏玉のやうな人格に至つては何人も推服して居つたのである。先生が章軒と號されたのは性質本來急激なるを自ら憂ひられ韓非子に「西門豹性急、故佩韋自緩、薰安子心緩、故佩絃以自急」とあるにより、韋の字をとつて號とせられたといふことである。先生古稀の時生徒一同大祝宴を張つてその

壽を祝つたことがあつた。予の如きは最も先生の恩顧を受けたのであるが、二十八年先生職を辭して東歸せられしに當つて、予に賜ふに「行無與今」の長篇と「磊落活潑之氣象須養之謹慎周詳之間乃爲乞病無勉之」の一語を以てせられた。この語は予が今に至つて座右の銘として常に感佩して居るところである。

五、金 佛 先 生

予が補九一級の時に英語を習ひ、豫料になつて博物を教はつた先生があつた。尊號を金佛先生と申上ぐ。その、顔面銅光を放つて居たからである。補充一級の時の英語教科書はユニオン第四讀本であつたが、その教授の親切で然も周到なことは予等をして刻々英語の力がつくやうな、感じをもたしめたのであつた。會々不審なことがあれば翌日必ず詳細に調べて來られて一語も忽がせにせず一句もあやふやに残されることがなかつた。先生の博物に於ける造詣また頗る深かつたやうで殊に實驗に重きを置かれて懇切に指導せられ、色々デリケートなことをまじめくさつた顔で辯ぜられるには面くらつたこともあつた。先生御本名は中川久知、大分縣竹田藩中川伯爵家の出、後代議士となられたこともあつたが龍南校には長く記念すべき先生である。

六、野 球

今日野球の隆んなことは驚異の眼を以て見るのであるが、予等が熊本在校時代は甚だ幼稚なものであつた。殊に熊本に於ては柔術や擊劍などは土風の鼓舞ともなるが、野球の如きは甚だハイカラの技として重んぜられなかつたのである。併し文明の新潮流には抗しがたく、新しい西洋競技も次第に輸入されて來たことはいふまでもない。

熊本に野球の入つたのは固より高等中學校からである。併し當時の野球技は甚だブリミチーブなものでグローブとかミットとかいふものは用ゐず、素面素手の豪傑振であつた。然るに次第に諸地方に擴がつた爲に明治三十年四月に山口高等學校と福岡でマツチすることゝなつた。その時の勇將には六尺二寸の中島章君(海軍造兵少將)などがゐて長大な体軀を以て大に奮闘された

のであるが、それが五高にとつての第一回インターカレッジ戦であつた。最近には五高は甚だ優秀なる成績を示して居るやうであるが、その第一回の對外戦、そして第一回の勝利は全く福岡會戦にあつたのである。この頃桐生高等工業學校長工學博士西田博太郎君と語つた時初めて知つたのは、西田君は當時山口高校の勇將として出陣したのであつたが不幸にして敗戦し恨を飲んで歸つたとのことである。これ長く記録すべき事實である。當時予等文科二年生一同は聲援として左の一文と金一封を選手諸君に贈り一杯を傾けて鼓勇奮闘を祈つたのであつた。

聞ク公等來月上潯山陽ノ健兒ト那珂河畔ニ相見ントスト彼已ニ遠ク軍ヲ懸ケテ來リ挑ム蓋シ尋常ノ敵ニ非ルベシ妙籌奇策公等固ヨリ遺算ナカルベシト雖僕輩區々ノ心尙至囑ニ堪ヘザルモノアリ敢テ薄儀ヲ呈シ謹テ微衷ヲ表ス若傾爐鼓勇ノ一助トナルヲ得バ望外ノ至リナリ

今から見れば頗るクラシカルな文章であるが、また當時の情況を想起せしめることが出来るであらう。

七、教授としての龍南生活

明治三十九年二月歐洲より歸朝して靜に風雲の會(?)を待つてゐたところが、圖らずも龍南の地に一事變發生し校長始め二三教師の更迭を見るに至つた。予の待つてゐた風雲はかやうな母校の風雲ではなかつたのであるが、新校長松浦寅三郎氏の懇切な勧告に従ひ翌四十年二月母校の教授として就任することゝなつた。予の龍南の地を去つたのは明治三十一年であるから、ちやうど九年の後に再び母校に歸つたのであつた。正門内の麥畑は舊に依つて青波をたゞよはせて居る、赤煉瓦の本館は依然として龍田山の綠屏をバックとしてその雄姿を誇つて居るのである。最も著しく變つたと思つたのは前庭や後庭の松樹の大きくなつて居ることであつた。沖、吉田兩雄の古戦場を始め狐狩した書庫脇の溝、屢々ハーン先生の散歩を見かけた西方体操場、その他數え來れば龍南の一木一石悉く懷舊の種ならざるはなくたゞ感慨無量であつた。

然るに予は一年ならずしてまた龍南を去ることゝなり爾來既に貳拾年ならんとして居るのであるが、再遊容易に期しがたきに

拘らず、三十余年前の龍南時代を回顧すれば常にその當時の幸福な生活を感謝せずには居られないのである。予が龍南校舎に於て教を受けた諸先生の内で今尙健在でゐらせられるのは嘉納治五郎先生を始め杉山岩三郎先生、余田司馬人先生、櫻井房記先生、内田周平先生、賀來熊次郎先生、大幸勇吉先生がたである。茲に謹んで諸先生の益々御多幸ならんことを祈願しつつ筆を擱く。

—(大正十五年十一月廿三日 新嘗祭の夕記す。)—